

# 鎌原観音堂

意見発表者17 (会場③埼玉県さいたま市)

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

鎌原観音堂(かんばんかんのどう)は、群馬県吾妻郡嬭恋村鎌原にある観音菩薩を祀る礼堂。

## 目次

- 1 沿革
  - 1.1 浅間山噴火と観音堂
- 2 交通
- 3 外部リンク

## 沿革

### 浅間山噴火と観音堂

1783年(天明3年)7月8日(旧暦)、火口より北側約12Kmにある鎌原村は、浅間山の、いわゆる天明の大噴火による土石流(長らく火砕流とされてきたが、発掘による出土品などには焼け焦げた跡が無いことから、大規模な岩屑なだれであったことがわかっている)に襲われ壊滅。このとき鎌原村の村外にいた者や、土石流に気付いて階段を上り、観音堂まで避難できた者、合計93名のみが助かった。この災害では、当時の村の人口570名のうち、477名もの人命が失われた。

1979年(昭和54年)の観音堂周辺の発掘調査の結果、石段は50段あることが判明した(言い伝えでは150段あまりの長い石段であるとされていたが、この幅で150段もの長い石段を建設することは、現在の建設技術をもってしても物理的に不可能であること。仮に150段であったならば、およそ20メートルもの高さになるため、わざわざそれだけ高い位置に観音堂を建立する事自体が不自然であることなどが疑問視されていた)。現在の地上部分は15段であり、土石流は35段分もの高さ(約6.5メートル)に達する大規模なものであった事がわかった。また、埋没した石段の最下部で女性2名の遺体が発見された(遺体はほとんど白骨化していたが、髪の毛や一部の皮膚などが残っていて、一部はミイラ化していた)。若い女性が年配の女性を背負うような格好で見つかり、顔を復元したところ、良く似た顔立ちであることなどから、娘と母親、あるいは歳の離れた姉妹、母親と嫁など、近親者であると考えられている。浅間山の噴火に気付いて、若い女性が年長者を背負って観音堂へ避難する際に、土石流に飲み込まれてしまったものと考えられ、噴火時の状況を克明に映している。

また、天明3年の浅間山の噴火で流出し、すべてのものを飲み込んだ土石流や火砕流は、鎌原村の北側を流れる吾妻川に流れ込み、吾妻川を一旦堰き止めてから決壊。大洪水を引き起こしながら、吾妻川沿いの村々を押し流し、被害は利根川沿いの村々にも及んだ。この一連の災害によって、1,500名の尊い命が奪われる大惨事に及んだ。また、当時鎌原村にあった「延命寺(えんめいじ)」の石標や、隣村(小宿村=現在の長野原町大字大桑字小宿)にあった「常林寺(じょうりんじ)」の梵鐘が、嬭恋村から約20km下流の東吾妻町の吾妻川の河原から約120年後に発見された。

村がまるごと飲み込まれたことから、東洋のポンペイとも呼ばれ、発掘による出土品や当時の様子、絵図などが観音堂に隣接した嬭恋郷土資料館に展示してある。

多くの火山災害の被災地では、生き残った住民が避難した先(場所)で新しい町を再建したが、鎌原は、生き残った住民が同じ場所に戻って、村を再建した非常に珍しい例である。

現在、火山災害から命を救った観音堂は厄除け信仰の対象となっており、地元鎌原地区の観音堂保存会の人々が交替でお堂に詰めて、先祖の供養を1日も欠かすことなくおこなっている。観音堂を訪ねると保存会の方から昔話りの話を聞くこともできる。

本尊は十一面観音菩薩



鎌原観音堂

15

いいね!

コメント

新

リンク

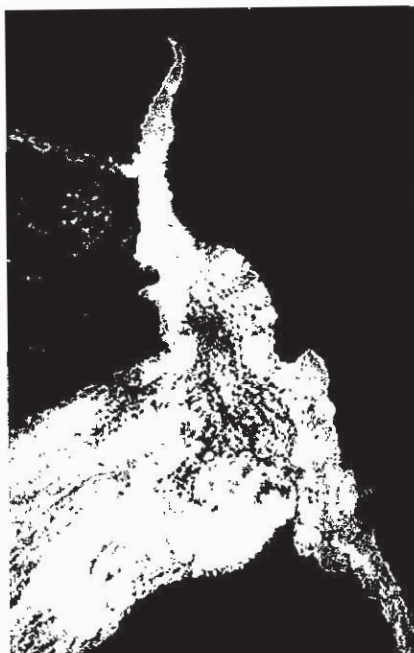
## 土砂ダム水位が2メートル上昇 奈良県十津川村

台風12号による紀伊半島豪雨で、決壊の恐れがある4カ所の土砂ダムのうち奈良県十津川村栗平の水位が、観測を始めた9日よりも約2メートル上昇していることが12日、国土交通省近畿地方整備局の観測データで分かった。

同整備局はこれまで、水面に投下した観測パイプで水位を把握していたが、航空写真の解析も加え、より正確な数値を算出した。

ほかの奈良県五条市大塔町清水、十津川村長殿、和歌山県田辺市熊野の3カ所の水位は低下しているが、4カ所いずれも今後の雨で決壊する恐れが継続。同整備局は排水手段について「どんな方法があるか検討段階。めどはまだ立てられない」と対応に苦慮。

2011/09/12 18:21 【共同通信】



決壊する恐れが続く奈良県五条市大塔町清水の土砂ダム＝12日午後1時9分、共同通信社ヘリから

菅野 2